

文学館だより

令和 3 年 8 月 1 日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

牧水先生が生家縁側で「ことんと音をさせて生まれた」という8月を迎えました。お客さまがそうするように、私もこっそり縁側をなでることがあります。2階では瀬音を聞きながら山を眺めます。牧水先生がそうであったように……。勤めている者の特権でしょうか!? 贅沢ですね。

主な牧水関連行事等をお知らせします

国文祭・芸文祭に合わせ、牧水先生生誕の地も盛り上げていきます。詳細はお問い合わせください。

は国文祭・芸文祭プログラムです

期 日	企 画 ・ 行 事 等	会 場
7/25(日)から	みなと展	若山牧水記念文学館
8/13(金)まで	第11回青の國若山牧水短歌大会応募締切	若山牧水記念文学館
8/22(日)まで	三浦家寄贈資料公開展 第1期「敏夫の遺したもの」	若山牧水記念文学館
8/21(土) 8/22(日)	第11回牧水・短歌甲子園(1次リーグ) (準決勝・決勝)	日向市中央公民館
8/24(火)	牧水先生生誕の日 1885年(明治18)	
9/05(日)から 12/05(日)まで	三浦家寄贈資料公開展 第2期「繁と敏夫」	若山牧水記念文学館
9/17(金)	第71回牧水祭 牧水先生命日 1928年(昭和3)	牧水生家周辺
9/25(土) 9/26(日)	全国高校生みやざき短歌甲子園(リーグ戦) (決勝・講評)	メディキット県民文化センター
10/16(土)	短歌オペラ「若山牧水 海の声 山の声」	メディキット県民文化センター

『みなと』展 今年も開催します

牧水・短歌甲子園を巣立っていった卒業生たち
卒業してもなお牧水・短歌甲子園にかかわり続けているOBOG「みなと」
彼らは高校生の夏 ここ日向で熱い短歌論を交わしました
大学生 社会人となった今も日向に集まり 現役高校生たちの牧水・短歌甲子園を支え続けています
今はそれぞれの地でそれぞれの道を歩む彼らですが 一年に一度 日向の「みなと」に戻ってきます
昨年はリモート開催であったため 再会が果たせませんでした
その分 今年の再会を楽しみにしています
今も歌を詠み続けている彼らが 今年も文学館に歌を寄せてくれました

題 詠 「明」
自 由 題
氏 名

明るさは影の強さで測るもの 薄い笑顔で救ってほしい
行進をひとり連れ行く夏のアリ孤独を死因のように言うなよ
第3回出場 田代 真由

就活の闇夜を照らす松明を天に蓄れよジャイアントコーン
三年の夏はうつろに適當にくらっとやったモナ王の箱
第8回出場 帖佐 光浩

車明と名付けし彼の日の両親の祈りと共にあしたを生きる
春晴れに心じんわりしあわせは口いっばいの角煮饅頭
第5回出場 宮本 卓明

白昼のかつら売り場にみひらける眼のなべて明るかりしか
折り紙に紫陽花をはなひらかしめ恋をひらかしめず六月は
第5・6回出場 狩峰 隆希

明け残る星は己を許すごとと光弱めて朝を迎える
内側に秘めたる君の夕暮れを溢れさせたまき 夏至が近づく
第2・3回出場 海老原 愛

「昨夜未明」みたいな時間に目が覚めて事件のようなラーメンすする
歯磨きは面倒くさい歯磨きは未来へ向けた営みだから
第6回出場 久永 草太

夏 どんな気持ちも灰に還るまで暗さもひとつの明るさである
雲と雲千切る大きな手を思う季節はそれそのものがさよなら
第6回出場 石井 大成

間違った息継ぎみたいなキスをする 岸につくまで夜は明けない
横断を待ってくれてるおじちゃんにお辞儀してからちゃんと轢かれる
第5・6回出場 牧 将暉

カフェオレを透明にする強引さにて側にいろと言われてみたい
告白とされる予感ハベトリコールかさが無いから走って帰る
第8・9回出場 宮本 陽香

どこまでも明るいいこころ太陽をうらがえしても當むように
テトリスに急いで負けるまらがえて君と会話を始めてしまう
第6回出場 長友 重樹

電灯は地上に落ちたお月さま 価値とは何か 明るき孤独
よく見せるための欲だけ知っていてやっぱり海は白いと思う
第7回出場 綾 香音

牧水・短歌甲子園当日は、会場である日向市中央公民館に展示する予定にしています。それ以外は、文学館ギャラリーに展示しています。展示室見学は有料ですが、「みなと」展は無料でご覧いただけます。

缶バッジに続いて、ぼっくん付箋紙を作りました



ぼっくん付箋紙
300円（税込）
各色 30 枚綴です

先月号で紹介した「ぼっくん缶バッジ」に続いて、7月から「ぼっくん付箋紙」の販売を始めました。私たち職員は、牧水先生キャラクターを親しみを込めて「ぼっくん」と呼んでいます。ご自宅に、職場に、ぼっくんを置いていただけませんか。

お買い上げいただいたお客様からのメッセージです。

とっても楽しみにしておりました
ありがとうございます
そして、職場で使おうと中を見てビックリ
まさに...現場にピッタリなお歌が...
牧水先生から励まされているような気持ちになりました
ありがとうございました
スタッフの皆様、頑張ってください

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

ふと見れば翼つらねてはるかなる沖辺へまへる海鳥の群
ふとみれば つばさつらねて はるかなる おきべへまえる うみどりのむれ

大正12年8月、家族とともに静岡県西伊豆海岸の漁村に滞在した時の作。身体を休め、家族とくつろぐことが主な目的であった。この「海鳥の群」も牧水には家族に思えたのかもしれない。（『命の碎片』より）この時のことを随筆『海辺八月』に残しているのので、一部紹介します。（※現代表記に直しています。）

昨年（昭和27年）の八月いっばいを伊豆西海岸、古宇（こゑ）という小さな漁村で過ごしました。八月いっばい、子供を主としてどこかの海岸で暮らしたい、そういう相談を妻としてから七月の初め私はその場所選定のため伊豆の西海岸へ出かけました。（略）かくして八月の朔日（すくち）にまず尋常三年生の長男と書生とが出かけ、二三日して残り三人の子供と妻と私とがその古宇の宿屋へと行きました。子供達の喜びは言うまでもありません。（略）